

完了形容詞と語彙概念構造

影 山 太 郎

1. 統語的受身と語彙的受身

Wasow (1977) は, (1) のような動詞的受身形を統語部門で, (2) のような形容詞的受身形を語彙部門で派生することを提案した。

(1) a. John was told the bad news.

b. He was much annoyed/bored/surprised by the news.

(2) a. This fact was unknown to/*by the police.

b. John looks very annoyed at/bored with/interested in the news.

これを承けて, Levin & Rappaport (1986) は形容詞的受身の形成を語彙部門内部の項構造のレベルに位置付け, (3) のような規則を立てた。

(3) 直接項 (direct argument) を外項化せよ。

Levin & Rappaport (p. 654) はこの規則の適用を(4)のような自動詞基体の例にも拡張し, (5)の不適格性と対比している。

(4) wilted lettuce, a fallen leaf, an escaped convict, a collapsed tent,
burst pipes, rotted railings, sprouted wheat, swollen feet, a rusted
screen, vanished civilizations, a recently expired passport, a failed
bank

(5) *a run man, *a coughed patient, *a swum contestant, *a flown
pilot, *a cried child, *an exercised athlete, *a sung artist, *a yawned
student, *a laughed clown

(4)の「受身形」の基体は非対格 (unaccusative) と呼ばれる自動詞であり,

その主語は内項であるから、規則(3)が適用する。他方、(5)の基体は非能格(ungative)と呼ばれる自動詞であり、その主語は内項ではなく外項であるから、規則(3)の指定に合わず、排除される。

ところが、英語の統語的な受身は内項と外項を備えた他動詞に対して働くから、たとえ語彙的な受身であっても内項のみを有する非対格自動詞に受身操作を適用するのは不自然である。そこで Pesetsky (1992) は(4)のような非対格と思える自動詞も項構造において特殊な外項 (A[mbient]-cause) を内包すると主張している。Pesetsky の挙げる例を追加しておこう。

- (6) elapsed time, departed travellers, newly arrived packages, newly appeared books, capsized boats, collapsed lungs, blistered paint, a failed writer, a deceased celebrity, a stalled machine, well-rested children, a risen Christ, a stuck window, drifted snow, a lapsed Catholic

Pesetsky (p. 101) の説明によれば、例えば「時間」というものは自らを動かすような原動力を内に秘めていて、その内在的原動力が外項として機能するから、elapsed time という「受身形」が成り立つ、とされる。しかしながら、(6)の基本動詞が外項 (A-cause) を持つというのは観念的には理解できるとしても、言語事実によって証明することは困難である。

第一に、外項と内項を持つ動詞には一般に -able 接尾辞が付くことができるが、(4)や(6)の自動詞はほとんどが -able を拒絶する。

- (7) *(by)goable days, *fallable leaves, *arrivable packages, *elapsable time, *appearable books, *deceasable partners

(perishable vegetables, dependable teachers, changeable weather などの例から、-able の外項は Agent に限られないことに注意。) 第二に、(4)(6)の基体となる自動詞の多くは、自発性を表す all by itself と共起しない。

- (8) a. *The new book appeared all by itself.
 b. *The packages arrived all by themselves.
 c. *His partner deceased all by himself.

もし内在的な原動力があるのなら、(8)のような表現が成り立ってもよいはずである。第三に、Pesetsky の理屈に従えば、太陽が輝いたり川の水が流れたりするのもそれらの内在的な原動力に還元できるはずである。ところが(9)のような「受身形」は到底成り立たない。

(9) *the shone sun, *a run river, *flowed tears, *shivered lips, *the twinkled stars

ここで着目したいのは、*the shone sun と the risen sun (Jespersen 1961) の対比である。物理学の知識は別にして、純粋に英語表現だけについて言えば The sun shines. と The sun rises. は共に太陽の活動を描写するものであり、両者の違いを内在的なエネルギーの有無などに求めるのは適当でない。*the shone sun と the risen sun を比較して分かることは、太陽が輝くのは永続的に続くのに対し、太陽が昇るという出来事は太陽全体が地平線の上に現れた時点で完結するという違いである。事態の完了を含意する rise は「受身形」を持つが、継続活動を意味する shine には受身が成立しない。

このように、上述の「受身形」の適否を左右する要因は、当該の事象が或る時点で完結するか否かというアスペクト特性に求めるのが妥当だと思われる。この観点は(4)(6)に対応する日本語表現から支持される。日本語では、これらの英語表現に対して受身形「られ」ではなく「た」が対応している（この「た」については金水（予定）を参照のこと）。

(10) wilted flowers : 枯れた草, swollen feet : 腫れた足, rusted iron :
さびた鉄, rotten eggs : 腐った卵, an expired passport : 期限の切
れたパスポート

この種の「た」は過去時制ではなく状態変化の完了を意味するから、それに相当する英語表現も受身ではなく完了を表すと見なすのがよい。この見方は Levin & Rappaport (1986 : 654, fn. 36) も註で簡単に示唆しているが、具体的な分析は未解決に残している。以下では、当該の完了表現が語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) と呼ばれる意味構造において派生されることを論じていく。

2. 完了結果の焦点化

語彙概念構造というのは、基本的には個々の語彙項目の概念的な意味を記述した表示形式であり、とりわけ動詞については、Dowty (1979), Pinker (1989), Jackendoff (1990)などで論じられているように、状態、継続動作、完了といった動詞のアスペクト特性 (Aktionsart) が重要になる。前述の Levin & Rappaport や Pesetsky あるいは Grimshaw (1990) などでは項構造 (argument structure) が -ed 接辞化の適用レベルとされているが、問題の「受身形」が完了というアスペクトを表すなら、項構造ではなく概念構造こそがその特性を記述するのにふさわしいレベルであるということになる。

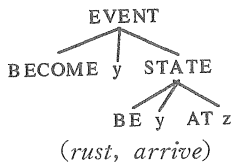
では、(4)や(6)の元になる非対格自動詞の意味を検討してみよう。

(4) wilt, fall, escape, collapse, burst, rot, sprout, swell, rust, vanish, expire, fail

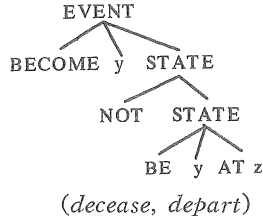
(6) elapse, depart, arrive, appear, capsized, collapse, blister, decease, stall, rise, stick, drift, lapse, rest

これらはいずれも或る状態ないし位置に至る (あるいはそこから抜け出す) という意味を表す。例えば、rust はさびた状態になることであり、arrive は目的地にたどり着くことである。これを (11a) のように表示しておく。(11a) は、或る指示対象 (y) が変化 (BECOME) を被り、その結果、y が z という位置・状態に到達するという意味を表す。また、decease は生きている状態でなくなることを、depart は或る場所にいなくなることを意味するから、否定要素 (NOT) を含めて (11b) のように表示する。

(11) a.



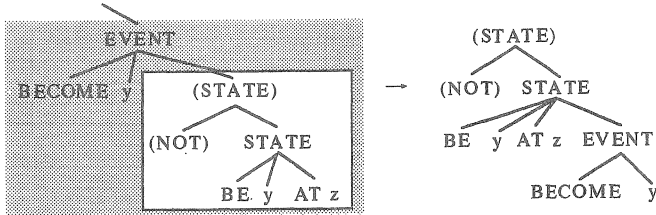
b.



AT z に具体例を当てはめると, arrive at Tokyo なら [BECOME y [BE y AT TOKYO]], decrease なら [BECOME y [NOT [BE y ALIVE]]] のようになる。

このように, (11) の概念構造は BECOME によって時間的な動きを表現しているが, これらの動詞に -ed が付くと概念構造が組み替えられる。「しぼむ」という動きを表す wilt に対して wilted は「しぼんでしまった」という結果状態を表し, 同様に「昇る」という動きを表す rise に対して risen は「昇りきっている」という完了状態を表す。一般的に言えば, -ed という接辞は, 状態の変化が次第に積み重なり, その最終的な culmination として特定の結果状態ないし結果位置が生まれるということの意味している。視覚的に図示すれば(12) のように表すことができるだろう。

(12)



これまで挙げた例は総て自動詞だったが, 他動詞の場合でも状態変化を含意するものは(12)の規則を受けるものと考えられる。つまり(12)の左側の構造で BECOME の上に CAUSE などがあってもよい。いずれにしても, 話者の視点が BECOME から徐々に移動し, 最後には結果状態に至る(上図左側の白抜き部分)。これを結果状態の焦点化と呼ぶと, 焦点化されない BECOME や動作様態など(上図の影部分)は必然的に背景化(grounding)される。Levin & Rappaport (1986) は, 英語の形容詞的受身が持つ状態性という特徴は形容詞という品詞から自動的に導き出されると考えているが, それでは日本語の「焼き魚, 焼いた魚」などの動詞を含む例が説明できない。むしろ逆に, 結果状態という意味を取り立てた結果, 形容詞的な機能が生じると言うべきである。

(12) の構造において重要な点を順次説明していこう。最も重要なのは, -ed 形

容詞の基体となる動詞が語彙概念構造に BECOME を含むという点である。BECOME は、変化が積み重なって結果状態に到達するという概念を表す。この「変化」という概念の有無は -ed 形と純粋な状態形容詞とを比べれば明白である。

- (13) settled weather/stable weather, a full-blown flower/a fully open flower, sunken eyes/hollow eyes, swollen feet/fat feet

単純な形容詞が純粋な静止状態を表すのに対して、完了形容詞は動きを踏まえた上での結果状態を意味している。

この分析によれば、BECOME を含まない動詞は完了形容詞にならないことが予測される。実際、継続動作を表す dance, cry などの非能格自動詞 (14 a), 到達点を含まない run, walk などの移動動詞(b), あるいは元来状態を表す動詞(c)は完了形容詞を形成できないことが分かる。

- (14) a. *a danced girl ('a girl who has finished dancing'), *cried children, *the shone sun
 b. *a run boy, *a swum boy, *flowed tears
 c. *the stayed man, *the remained problem

日本語でも「踊った少女, 泳いだ子供, 暴れた馬」などは単純な過去の解釈しか持たない。

当該表現が状態変化に焦点を当てていることは、それらに付随する修飾語の現れ方からも示される。すなわち、完了形容詞と共起する修飾語は完了の時間あるいは結果状態の有様を描写するものに限られる。

- (15) a. recently arrived packages, the newly appeared book
 b. a full-blown rose, a full-grown child, a grown-up woman, half-perished plants
 c. a clean-shaven face, hard-boiled eggs, the thin-sliced ham, red-dyed hair
 d. a paint-smeared wall/*the wall-smear~~ed~~ed paint, a feather-stuffed pillow/*pillow-stuffed feathers, blood-soaked rags/*rag-soaked

blood—Yumoto (1991: 115)

(a)の *recently, newly* は事象が完了する時間を表現する。(b)の修飾語は結果状態の様子を描写している。このことは他動詞から派生した完了形(c)についても共通する。(d)では、*-ed* 規則が働く前に、次に示すような行為の完了化が起こっていると考えられる。

- (16) a. *smear paint on the wall*→*smear the wall with paint*
 b. *stuff feathers into the pillow*→*stuff the pillow with feathers*
 c. *Blood soaked the rags.*→*The rags are soaked with blood.*

さて上掲図(12)に戻ると、ここでは焦点化という認知的機能を構造上の「移動」として規定した。すなわち、焦点化された STATE の部分が切り取られて EVENT の上に接木される(概念構造では移動痕跡は残らないものとしておく)。焦点化をこのような構造的繰り上げとして捉える根拠はあるのだろうか。英語では統語的な受身の *-ed* は内項を外項に繰り上げる機能を持つから、それと同一形態の完了 *-ed* も同じように概念構造で繰り上げ操作を司ると考えるのは不自然ではない。これは他動詞の場合に明瞭である。

- (17) a. *minced meat*/*ひかれ肉, ひき肉, ひいた肉
 b. *boiled egg*/*ゆでられ卵, ゆで卵, ゆでた卵
 c. *lost property*/*落とされ物, 落し物, 落とした物

完了形容詞は多くの場合、名詞修飾用法で用いられるが、形容詞と名詞の関係は叙述関係(predication)によって解釈される。もし英語の *-ed* 形を「受身」と見なすと、「*ひかれ肉」などが成り立たないのは、単に日本語では語彙的な受身が存在しないからだ、と説明されるかも知れない。しかしながら、ここで重要なのは、「*ひかれ肉」の代わりに能動形を用いた「ひき肉」が良いということであり、更にそれは「た」を用いた「ひいた肉」とほぼ同義であるという点である。これは自動詞でも同じことで、多くの場合、「た」に相当する複合語を見つけることができる。

- (18) 破れた障子／破れ障子, 禿げた頭／禿げ頭, 汚れた下着／汚れもの,
 焼けたひばし／焼けひばし, 荒れた寺／荒れ寺, 濡れた雑巾／濡れ雑

巾

「ひき肉、破れ障子」などの複合名詞は、「とびうお、暴れ馬、あそび人、踊り子」のような名付け機能による複合語と異なり、動詞によって示された状態変化を実際に被った事物を表す。例えば「破れ障子」は必ず破れていなければならない。破れていない破れ障子はない。これに対して、「とびうお」は単なる名付けであるから、飛ばないとびうおがいても不思議ではない。このように、「破れ障子」の類の複合名詞は基体になる動詞の意味を直接に反映しているから、その動詞の項関係によって意味解釈が決まるものと考えられ、この意味解釈は次のような叙述関係で行うのが自然である。これを項構造で示すと、(19 a) のように外項と名詞を結び付けることはできるが、(19b) のように直接、内項と名詞を叙述関係で結ぶことはできない。

(19) a. (x <...>) 名詞 b. (... < x >) 名詞

名詞句である boiled egg や「ゆでた卵」の場合も同じ様に叙述関係によって形容詞と名詞の解釈が決定されるとするなら、完了結果の焦点化による外項化は、この叙述規則を満たすために必要な操作であるということになる。

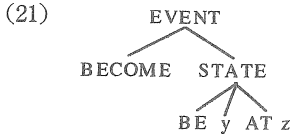
ところで次のような例は、一見、状態結果の外項化では十分に扱えないように思える。

- (20) a. *the (recently) occurred events, *the (recently) happened accidents, *the outbroken fire
 b. a vanished civilization, *a disappeared civilization
 c. a retired officer, *a quit officer

Vendler (1967) や Dowty (1979) などの動詞分類によれば、瞬間動詞である occur, happen は fall, arrive など同じく到達 (achievement) の部類に属するから、(20a) の表現が成り立ってもよさそうであるが、実際は不適格だと判断される。

先に示した構造図 (12) を振り返ってみよう。(12) では BECOME の隣に y という項が存在し、この指示対象についてそれがどのように変化するのかを示している。y arrived at z. というのは y という対象が既に存在し、それ

が z に到着したことを表す。ところが、An accident occurred. というのもともと事故という対象物があってそれが起こったというのではない。無の状態から事故が生じたのである。そこで、先の(12)では BECOME の項として y があるのに対して、occur や happen のような発生・出現の動詞は BECOME の隣の y を持たないと考えてみよう（この考え方は金水（予定）に依る）。



BECOME の項 y の有無は (20b) の *vanish* と *disappear*, (20c) の *retire* と *quit* の違いにも反映される。OED の定義を簡略に引用しておく。

- (22) *vanish* '1. become invisible, esp. in a rapid and mysterious manner. 2. disappear by decaying, coming to an end' cf. *vanish away*
disappear '1. cease to appear or be visible. 2. cease to be present, be lost' cf. **disappear away*
retire 'withdraw from office or an official position...(esp. after having made a competence or earned a pension)
quit 'cease, stop, discontinue; give up, renounce'

この定義によれば、*vanish* は特定の対象が徐々に消滅に至ることを意味するが、*disappear* は元の状態を認知する暇もなく一瞬の内に消滅することを表す。*retire* と *quit* の違いも同様である。これらのうち、元の状態を認知できないほど瞬間的な出来事を意味する *disappear*, *quit* は完了形容詞になることができない。日本語でも「起こった事故，発生した事件」などは過去の解釈しか持たない。

このように occur, happen, disappear などが完了形容詞にならないことは、それらの概念構造を (21) のように想定すれば、先の規則 (12) から自動的に導き出すことができる。(12) の右側の構造では STATE が繰り上げられ

た後、BECOME の隣に Y が残っている。ところが、occur などの構造である (21) に同じ規則を適用すると、BECOME の隣に Y が残らないことになる。すると、その構造では、繰り上げられた STATE と下に残された EVENT との繋がりが不明になり、意味解釈が適正に行われない。つまり、適正な (12) の構造では STATE 内の Y は EVENT 内の Y と同一対象を指すから、その Y に関して EVENT 部分が STATE 部分を叙述することが正しく理解できる。他方、残された EVENT の中に Y が欠如していると、STATE との関連性が保証できず、叙述関係が成り立たない。これは空の量子化 (vacuous quantification) が不適性であるのと同じことである。その結果、*an occurred accident などは不適格になる。

この分析によれば、大変奇妙に思える (23) のような表現も説明が付く。

(23) a. it is interesting to find the following newspaper example, about
a cook turned specialist butcher. (D. Kilby, *Descriptive Syntax and the English Verb*, p. 47)

b. The reporter-turned-hostess-turned novelist is Sally Quinn.
 (ジーニアス英和辞典)

x-turned y は「xからyになった人」という意味であり、概念構造で表せば [BECOME x [BE y]] となる。この構造の BE y を繰り上げると、下には BECOME x が残る。xはyと同一対象を指すが特徴付け (つまり職業) が異なるから、xを複合化して x-turned という表現が得られる。

3. 再帰目的語構文に由来する完了形容詞

前節では非対格自動詞に基づく完了形容詞を検討したが、状態変化の焦点化という考え方を応用すれば、他のいくつかの現象も同じ分析の射程に含めることが可能になる。まず、次のような再帰代名詞を含む他動詞と、それに対応する「受身形」を比べてみよう。

(24) a. He absorbed himself in music./He was absorbed in music.

- b. They devoted themselves to football. / They were devoted to football.
- c. It took me half a year to accustom myself to the new environment. / I am already accustomed to the new environment.
- d. He is willing to engage himself in every new project. / He is engaged in a new project.

他に accommodate oneself to/be accommodated to, acquaint oneself with/be acquainted with, address oneself to/be addressed to, commit oneself to /be committed to, concern oneself with/be concerned with, confine oneself to/be confined to, dress oneself in/be dressed in, prepare oneself/be prepared など。学校文法ではこのような組は「能動」対「受身」という対立で捉えられているが、これらの -ed 形を通常の受身として統語的に派生すると、交差制約 (Postal 1971) と呼ばれる統語条件に違反することになる。

(25) a. John shaved himself. →?*John was shaved by himself.

b. Mary blamed herself. →?*Mary was blamed by herself.

交差制約の本質は明らかではないが、いずれにしても (24) の -ed 形を統語構造で作るのは不可能と考えるべき。これらの -ed 形が形容詞であることは、通常、形容詞に付く -ness や -ly (副詞) の接尾辞がこれらに付加することからも証明される。

(26) absorbedly, devotedly, assuredness, preparedness

形容詞は一般に状態を表すが、(24) の -ed 形も左側の能動文に対応する行為が到達した結果状態を意味している。このことは、能動形自体の意味とも合致する。すなわち、これらの能動構文はいずれも、再帰代名詞を直接目的語に、そして前置詞句を着点に取っていて、主語が自分の身体あるいは心を全面的に或る状態に委ねるといった意味合いを表す。概念構造としては概略 (27) のように表示できよう。

(27) CAUSE x_i [BECOME x_i [BE x_i ENTIRELY IN STATE z]]

能動文はアスペクト的には継続的活動であるが、着点で表された状態に身体あ

るいは心が完全に没入してしまうと、完了結果を表すことになり、先の規則(12)が働いて、完了形容詞が得られる。語彙概念構造では再帰代名詞がそのまま現れるわけではないから、統語構造に属する束縛理論の制約は免れることができ、従って(25)で指摘した問題は生じない。着点を明示しない *rest oneself/well-rested* (cf. **sleep oneself/*well-slept*) なども同様に分析できる。なお、ここでも日本語「た」との平行性が観察されるのは興味深い(手慣れた仕事、仕事に熱中した人、自分に合った仕事)。

(24) に対して、同じ再帰目的語構文であっても(28)のような「受身形」は不適格である。

(28) a. I exerted myself to materialize the plan.

*I was exerted to materialize the plan.

b. Sue enjoyed herself at the party.

*Sue was enjoyed at the party.

exert oneself「努力する」、*enjoy oneself*「楽しむ」は本来的に完了点を含まない継続活動であるから、我々の分析からすると完了形容詞にならないことが正しく予測される。

この分析を応用すれば、次のような結果二次述語構文における「受身」も概念構造での完了形容詞として統一的に扱うことができる。

(29) a. Tory was all danced out. —Croft (1991 : 265)

Tory danced himself out.

[DANCE x [BECOME x [BE x OUT]]]

b. The game was rained out.

?It rained the game out.

c. We're all talked out. —Bolinger (1971 : 106)

We've talked ourselves out.

ここで注目すべきは同じ再帰目的語構文が心理動詞にも見られることである。

(30) a. The children amused themselves with the new TV games./The

children were amused with the new TV games.

- b. Let us content ourselves with a small success./Let us be contented with a small success.
- c. Bill interested himself in Indian culture./Bill was interested in Indian culture.

これらの能動形の概念構造は概略 (31) のように表すことができるだろう。

(31) EXPERIENCE x_i [BECOME x_i [BE x_i AT PSYCHOLOGICAL STATE with z]]

これは状態変化の BECOME を含むから、結果状態の焦点化を適用すると amused, contented などの形容詞形が派生される。

心理動詞は Belletti & Rizzi (1988) や Grimshaw (1990) などで近年盛んに論じられているが、そこでは再帰目的語構文との関連は全く等閑視されている。我々の分析に対して一見、問題になるのは、明示的な再帰目的語を取ることのできない annoy, frighten, surprise, scare などである。しかし、心理動詞でないものでも adjust (oneself) to/be well-adjusted, descend (*oneself) from/be descended from のように再帰目的語を任意的にあるいは義務的に欠くものがあるから、annoy なども概念構造では (31) の構造を取るものと考えておく。

ただし、annoy などは再帰目的語の有無に関わらず (32) のような構文では用いられない。

(32) *John ✓annoyed (himself) about the problem.

✓印は現実には現れない形を表し、仮定の ✓annoy を想定する考え方は Pesetsky (1992) と共通する。このような仮定の再帰動詞を設ける根拠はいくつかある。まず歴史的な事実として、現在は不可能な再帰他動詞形ないし自動詞形も古い英語では記録されている。

(33) a. *delight* (with refl.) : 1611 I will delight my selfe in thy statutes.

- b. *puzzle* (with refl.) : 1883 Many readers have doubtless puzzled themselves with the two different forms of the same word.

c. 1699 Every parish will scare at thee as a monster of men.

第二点として心理動詞の名詞形が挙げられる。よく知られているように, annoyance のような名詞形は自動詞的な意味を持つ。

- (34) a. my annoyance at the noise
 my boss's satisfaction with the result
 b. Sue's interest in Japanese culture
 their contentment with the small success

この対応については従来さまざまな分析が提出されてきたが, いずれも満足のいくものではない (Wasow 1977, Rozwadowska 1988 等)。ここで注目に値するのは, annoyance などが再帰目的語構文の absorb/absorption, devote/devotion などと同じパターンを取ることである。

- (35) a. Bill's devotion to his research
 b. her absorption in the study of physics
 c. Jim's acquaintance with Chinese cooking

従って, (31) を意味する \surd annoy を設ければ名詞形 annoyance の意味は正しく記述できる。

最後に, 我々の分析の拡張として bearded, dark-haired などに見られる -ed を考えてみよう。

- (36) bearded, whiskered, feathered, petaled (flowers), legged (furniture), horned (animals), helmeted, spectacled, coated

この -ed は名詞に付いて所有物ないし付属物を表すから, これまで扱った動詞に付く -ed とは一見異なっている。しかし Marchand (1969: 264) によれば, 両者は語源的には同じ物であったらしい。そこで, 例えば bearded の概念構造を次のように想定してみよう。

- (37) [BECOME y [BE y WITH BEARD]]

BE WITH は所有ないし付属を意味する。この構造で結果状態を焦点化すれば「ひげが備わった状態」ということになり, まさに bearded の意味に対応する。おもしろいことに, これらの英語表現とほぼ平行的に日本語でも「た」

で所有を表すことができる（髭をはやした男，帽子をかぶった女性，足の付いた家具）。

小論では，形容詞的受身とされる -ed の完了相が概念構造における状態変化の焦点化に求められることを日本語の「た」と対照しながら論じた。この操作は語彙部門で起こるから，それを被った完了形容詞は意味の慣習化によって語彙化されることが当然予想される。例えば rotten は I should say it is rotten luck. や It's a rotten shame. (いずれも Hemingway "The Sun Also Rises") のように「いやな，ひどい」等の意味に変化するが，このような比喩的拡張については述べる余裕がなかった。また，decided, pronounced, hurried, tried のように本稿の BECOME 分析で扱いにくいと思える例も指摘できるし，更に重要な問題として，概念構造における完了形容詞と項構造における形容詞的受身との違いも未解決で残っている。

引用文献

- Belletti, A. and L. Rizzi (1988) "Psych-Verbs and θ -Theory," *Natural Language & Linguistic Theory* 6, 291-352.
- Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*. Mouton.
- Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. University of Chicago Press.
- Dowty, D. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. D. Reidel.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*. MIT Press.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jespersen, O. (1961) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part V. George Allen & Unwin.
- 金水 敏 (予定)「連体修飾の『～タ』について」田窪 (編)『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版。
- Levin, B. and M. Rappaport (1986) "The Formation of Adjectival Passives," *Linguistic Inquiry* 17, 623-661.
- Marchand, H. (1969) *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation*. C. H. Beck.
- Pesetsky, D. (1992) *Zero Syntax*. Ms., MIT.
- Pinker, S. (1989) *Learnability and Cognition*. MIT Press.

- Postal, P. M. (1971) *Cross-Over Phenomena*. Holt, Rinehart & Winston.
- Rozwadowska, B. (1988) "Thematic Restrictions on Derived Nominals," W. Wilkins (ed.) *Syntax and Semantics 21 : Thematic Relations*. Academic Press.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- Wasow, T. (1977) "Transformations and the Lexicon," P. Culicover et al. (eds.) *Formal Syntax*. Academic Press.
- Yumoto, Y. (1991) "The Role of Aspectual Features in Morphology," *English Linguistics* 8, 104-123.

——文学部教授——